■読売新聞2018年10月31日(水)掲載記事 『平成時代静岡空港(中)』

平成時代
静岡空港
中

FDA 観光振興の一翼

手探りの航空事業 軌道に

「静岡空港から島根に行けると聞き、初めて行ってきた。移動はあっという間だった」。10月下旬、フジドリームエアラインズ（FDA）出雲便から降りてきた50歳代の夫婦は、満足そうに旅を振り返った。

3月末に就航した出雲便の9月までの平均搭乗率は約8割の高水準だ。その多くは静岡から出雲に向かう観光客が占める。ツアーを販売する「静鉄観光サービス」（静岡市）の担当者は「週末を挟むツアーは座席がとれないこともあるほどだ」と驚く。

「出雲は観光資源が豊富で、新しい需要が創出できるのではないか」。出雲便の就航を発表した当時、FDAの三輪徳泰社長はこう意気込んだ。静岡空港の開港を機に誕生したFDAは、今年で設立から10年。その歩みは、挑戦の連続だった。

◇

「私自身、それほど成功の確信があるわけではなかった」。FDA会長の鈴木与平さん(77)は振り返る。

静岡空港の国内線を支えてきたFDA

FDAの親会社、鈴与の社長だった鈴木さんは、静岡空港の建設が具体化する中、航空事業への参入を考えたが、新規参入した航空会社はどこも苦戦していた。事前に航空関係者らに相談しても、9割は「やめておけ」との答えだった。

諦めきれずにいた鈴木さんの背中を押したのは、イギリスでの航空ショーで見た、ブラジル・エンブラエル社の小型ジェットだ。地方空港にはちょうど良い大きさに思えた。

海外の航空事業を研究すると、小型飛行機で地方都市間を結ぶ事業が成長してきていた。「思い切ってやってみるか」。2007年から準備を本格化させ、翌年にFDAを設立した。

静岡空港の開港時、最初に選んだ就航先は小松（石川県）、熊本、鹿児島。しかし、初年度の平均搭乗率は44・5％にとどまり、小松、熊本は11年に運休した。手探りが続いた。

「少しずつネットワークを広げていこう」。そんな思いだったが、10年1月、日本航空（JAL）の経営破綻という想定外の事態が起きる。JALが撤退した札幌、福岡便を引き継ぎ、愛知県営名古屋空港などでも路線も引き継いだ。76～84席の小型ジェット機で、地域間を結ぶビジネスモデルが軌道に乗っていった。

◇

FDAは、コストを抑え、サービスを維持するためのユニークな工夫も続けている。乗客に配る茶菓子や飲み物は、PRしたい地元企業に安価で提供してもらう。機体にはネーミングライツ（命名権）を導入し、自治体の観光PRなどに活用してもらっている。

現在、FDAは静岡も含め全国の計15空港に乗り入れ、17路線を1日計35往復している。採算ラインと考えていた飛行機10～15機体制での運航体制も実現し、15年度から3期連続の黒字だ。今後、さらに機体を増やしたい考えだ。

FDAについて、慶応大商学部の加藤一誠教授（交通経済）は「地元自治体と協力して丁寧に需要を掘り起こす取り組みが奏功している」と評価する。一方で、「観光客が中心の路線が多く、景気低迷時にいかに収益を維持していくかが課題となる」とも指摘している。

静岡空港の2018年度の国内線運航状況

	路線	便数
FDA	福岡	4
	札幌（丘珠）	1
	出雲	1
	鹿児島	1
ANA	札幌（新千歳）	1
	沖縄	1

※便数は1日あたり、往復
※丘珠線は10月28日からの冬季期間運休